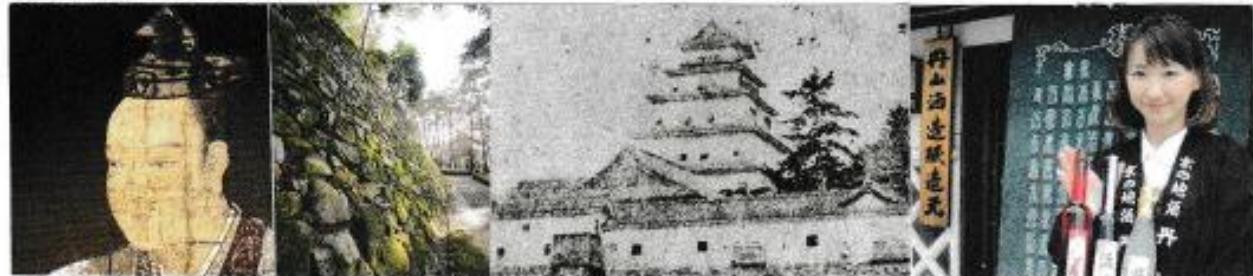


2020年NHK大河ドラマ<麒麟がくる>
花の丹波“亀山(亀岡)”城下町探索!
2019年4月4日(木)

「敵は本龍寺にあり！」 戦国乱世の智将・明智光秀、丹波亀山城より出陣！

京から西へ凡そ15km。小高い丘上に明智光秀によって築かれた丹波亀山城。京と丹後方面を結ぶ街道上の交通の要衝でした。天正10年(1582)、6月1日夜半。日本史上最も注目すべき下廻上「本能寺の変」が、此處亀山城を起点に鳴動する。

天下統一を目指す主君・織田信長の命により、明智光秀は丹波攻略の軍事拠点・亀山城から13,000の兵を率いて出陣する。表向きは中国地方で毛利氏と戦う羽柴秀吉救援を装い、急遽蹕を返して京へ向かい本能寺の信長を自害に追い込んだのでした。



明智光秀像

復元石垣と昔日の5層天守

女性社氏の船・長谷川渚さん

東京オリンピック開催の2020年は、21世紀日本の大きな節目の年。その記念すべき年のNHK大河ドラマ<麒麟がくる>は、なんとあの明智光秀(主演:長谷川博巳)が選ばれたのでした。

「悪役(ヒール)から、英傑(ヒーロー)へ！」の華麗なる転身は、一体どうして？

正しく、大河ドラマ新時代の幕開け！<麒麟がくる>は、戦国初期群雄割拠の戦乱の中で、若き光秀、道三、信長、そして秀吉、家康などが、天下を視野に己の命と愛をかけて競い合う“一大叙事詩”。従来とは異なる新しい解釈で、果敢に動乱の時代を駆け抜けた英傑たちを描く新大河ドラマ「麒麟がくる」に、乞うご期待！

案内人:牧彰(会員)

<宗教法人「大本(おほもと)」本部(旧丹波亀山城址)>

明智光秀は、天正5年(1577)頃丹波攻略の拠点・亀山城を築城。天正8年(1580)丹波国を拝領した光秀は、本格的な城下町整備と領国経営に着手するが、僅か2年後に「本能寺の変」を起すことになる。

光秀没後、秀吉・家康支配下で城下町が整備されて丹波亀山城は近世城郭として完成するが、明治維新後廃城となり、天守などの建物や石垣は全て破却・解体払下げとなる。

明治2年(1869)、東海道亀山宿との混同を避けて「亀山から亀岡へ」地名改称する。また、大正8年(1919)以降、宗教法人・大本教所有地となるが、「治安維持法」による2度の弾圧などの糾余曲折を経て、大本教による石垣の一部が積み直されて今日に至る。

また、「大本」本部は、山桜の新種(コノハナザクラ)などの桜や紅葉の名所として知られる。

<丹山酒造>

京都・嵐山上流の名水と恵まれた土壌とを活かして、酒米を無農薬で自家栽培している。恵まれた環境と美味しい酒を作る信念とが醸し出すこの“母なる大地の恵み”に乾杯！

◇参集地: JR「茨木」駅8時45分(時間厳守) 8:55発乗車、9:59「亀岡」着

往路: JR「茨木」→「亀岡」.....840円

復路: JR「亀岡」→「嵯峨嵐山」→「嵐電嵯峨」→「西院」/阪急「西院」→「茨木市」.....740円

◇順路: 「茨木」⇒「亀岡」～<南郷公園>～<大本教本部(亀山城址)>～<丹山酒造(見学・試飲)>～(旧城下町散策)～<がんこ亀岡 楽々荘>～「亀岡」⇒「嵯峨嵐山」～「嵐電嵯峨」⇒「西院」/阪急「西院」⇒「茨木市」

◇華の宴:<がんこ亀岡 楽々荘>—13時00分～15時00分—(定員30～40名)

〒621-0861 亀岡市北町44 ☎0771-56-8880 JR嵯峨野線「亀岡」駅徒歩7分

京都鉄道会社創立者・田中源太郎が、明治31年(1898)に自らの生家を改築し“楽々荘”を建設しました。

この歴史的お屋敷が、この度「京都亀岡楽々荘」となりました。広い庭園を眺めながら、お屋敷でごゆっくりお食事をお楽しみください。(HPより)

◇参加費: 3,200円(食事代) 飲物類は、別途各自払いとする。

*会員外は、他に資料代(100円)、会員には会員料1,000円/人の補助あり。

◇申込先: 「街 ing いばらき」代表・阪田浩 (080-1436-9881) *会員外の参加、大歓迎!

Tel & Fax / 072-627-3480 E-mail / ibarakisakata@crux.ocn.ne.jp

*本会行事は、自由参加です。不測の事故・傷害などは、自己責任でご対応ください。

「天下の面目をほどこし候」

数々の功績を残し、戦国の歴史を大きく動かした「明智光秀」。歴史上の武将のなかで、最も知られている一人と言っても良いでしょう。

龜山（現在の亀岡）、そして丹波の民衆に敬われ、領国経営に努めるかたわら、連歌や茶道にも造詣深い教養人でもありました。

「本能寺の変」の真相のほどは明らかではありませんが、かつて「謀反人」「逆臣」と呼ばれていた光秀のイメージは、近年になって随分と変わってきました。

織田信長の強引な政治手法を見過ごせば、当時の日本の体制や伝統を大きく変えることにつながり、それに対しても毅然と立ち向かった光秀こそ、もっと賞されるべきではないでしょうか。

あまり知られていない光秀の功績をこのパンフレットで知っていただければ幸いです。



明智光秀肖像(本徳寺蔵・大阪府岸和田市)

光秀の出生の謎

明智光秀の家系については数々の説があります。.

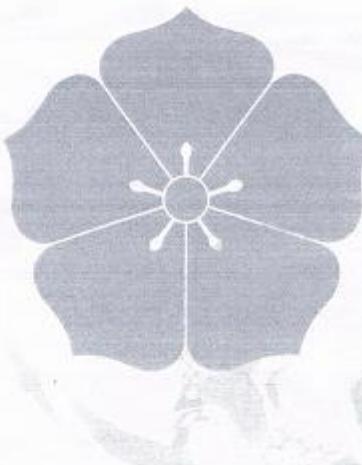
清和源氏、土岐氏の庶流であると光秀自身も名乗っているように、美濃国の出身だろうと思われています。しかし、光秀の出自が記されている数々の史料に登場する父親の名前は一致しておらず、それらの人物が実在していたかどうか定かではありません。

出生の地や生年についても同様で、現在の岐阜県恵那市明智町、可児市、山県市美山町の3ヶ所に伝承や史跡が点在しています。

光秀が歴史上に登場するのは、朝倉義景のもとに身を寄せていた足利義秋（義昭）を上洛させるために織田信長と会ってからとなります。

当時ではめずらしい 色のついた家紋

明智家の家紋とされる「水色桔梗」（みずいろききょう）紋は、明智家も流れをくむ土岐家の代表的な紋です。土岐家発祥の地である「土岐（とき）」という地名は、桔梗の古語「岡ととき」の咲く場所であることに由来し、そのため土岐家は桔梗を家紋にしましたといわれています。家紋自体は「色」がついた「紋」として、非常にめずらしいことでも知られます。



『天下の面目をほどこし候』

明智光秀が丹波を攻略し平定を成し遂げた天正8年（1580）に、織田信長が家臣佐久間信盛に宛てた折檻状に記された言葉。信長はこの書状の中で、丹波における光秀の軍功をまず第1に称賛していることからも、織田家中でいかに優秀であったかが想像できます。

（表紙写真）丹波八上高城山合戦図（誓願寺蔵・兵庫県篠山市）

光秀の丹波攻略と 平定の拠点「亀山城」



城DATA

- | | |
|------------------|----------------|
| ●所在地:亀岡市荒塚町 | ●築城者:明智光秀(第一期) |
| ●別称:亀宝城、霞城、亀岡城 | ●形式:平山城 |
| ●築城年:天正5年(1577)頃 | ●遺構:石垣・堀など |

亀山城はSimple is BEST!?



亀山城天守古写真(美田村謙教撮影)

明智光秀は、天正5年(1577)頃、丹波攻略の拠点とするために丹波亀山城を築城しました。保津川と沼地を北に望む小高い丘(荒塚山)に築かれましたが、正確な史料が残っていないため全容は分かっていません。光秀は近隣の村から人を呼び寄せ、城下町を形成しました。天正8年(1580)に丹波国を拝領した光秀は、本格的な城下町の整備と領国経営に着手しますが、そのわずか2年後

に「本能寺の変」が起こります。亀山城はその後、羽柴秀俊(小早川秀秋)によって修築され、慶長15年(1610)岡部長盛の代に天下普請により近世城郭としての亀山城が完成します。この築城にあたっては城づくりの名手・藤堂高虎が繩張りを務め、五重の層塔型天守が造営されました。現存する古写真は、明治初期に撮影されたものです。

亀山城を歩く

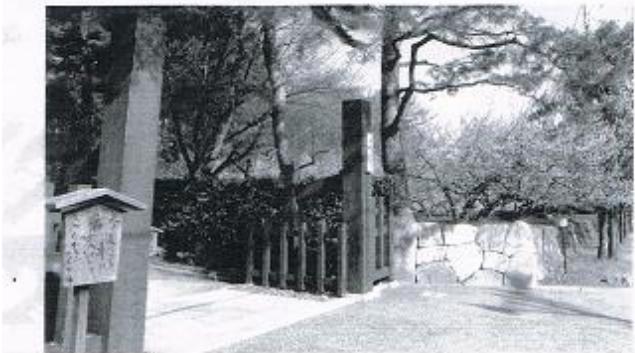
亀山城は、明治維新以降廢城処分となり、所有者が転々とします。紆余曲折の末、荒れ果てた城跡を宗教法人大本が入手し現在に至ります。石垣は大本によって修復されており、総合受付で見学を申し込むと内堀跡や本丸付近の石垣を見学することができます。



境内の内堀跡。
現在は万桜池と呼ばれています。



石垣に刻まれた刻印。
天下普請の名残を感じられます。



5年にも及ぶ丹波攻略

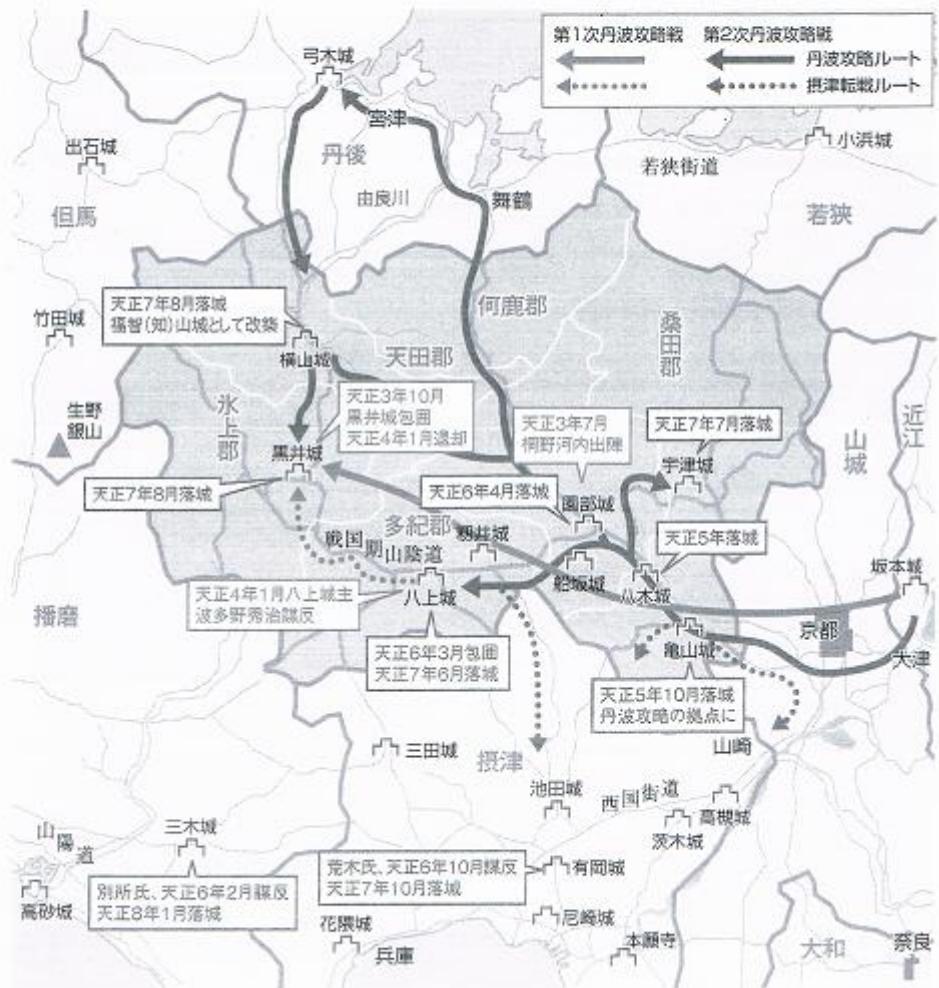
◆丹波の情勢と第1次丹波攻略戦

明智光秀が丹波攻略を開始した天正年間、丹波では、内藤氏(船井郡)、波多野氏(多紀郡)、赤井・萩野氏(水上郡)などが勢力を誇っていました。丹波の国人衆たちは、織田信長が足利義昭を奉じて上洛したとき、信長の家臣に加わったといわれています。しかし、信長と義昭が対立するようになると、丹波国人衆は反信長の姿勢をとり始め、その動向に怒った信長は、光秀を総大将として丹波攻略に乗り出します。

第1次丹波攻略戦では、水上の赤井・萩野氏を攻めますが、背後に位置する多紀郡の波多野秀治が突如叛旗を翻したため、光秀軍は敗走を余儀なくされました。



丹波攻略マップ



(参考文献「新修龜岡市史本文編第2巻」)

◆第2次丹波攻略戦

第2次丹波攻略戦は、軍事拠点の丹波亀山城を築城し、亀山から西へ攻めることになります。亀山の並河氏、園部守人の小畠氏、美山の川勝氏ら丹波国人衆を家臣として召し抱えながら侵攻を進め、八木城の内藤氏、篠山・羽井城の羽井氏、細工所城の荒木山城守に続き、八上城の波多野秀治を攻めました。

兵糧攻めと十数回に及ぶ壮絶な戦いの末、秀治は降伏し、安土へ送られ処刑されます。丹波を代表する武将波多野秀治・秀尚兄弟の降伏により、事実上の丹波攻略戦を成し遂げた明智光秀は、信長に『天下の面目をほどこし候』と絶賛され、織田家家臣のトップに躍り出ることになります。その後、篠山城の築城により八上城下にあった誓願寺や来迎寺などは篠山城下に移されますが、丹波一大決戦の古戦場となった八上城跡は、丹波富士の呼称をもつ秀峰が歴史を今に伝え、往時の面影が偲ばれます。



八上城跡(兵庫県篠山市)



八上城跡記念碑

悲運の武将 波多野秀治

波多野氏は、室町時代の後期、細川政元から波多野清秀が丹波多紀郡に所領を与えられてから、天正7年(1579)に八上城で滅亡するまで4代にわたって、勢力を誇った一族です。その中でも最も有名なのは4代秀治で、悲運の武将としてよく知られています。

弘治3年(1557)、三好長慶、松永久秀らによって八上城が占拠され、秀治は父清通とともに10年間流浪の生活を送りますが、その後、黒井城主萩野直正や別所氏の援助を受けて、永禄9年(1566)、八上城を奪回し、再び丹波一円に勢力を広げました。

永禄11年(1568)、織田信長が上洛すると、太刀や馬を献上して友好を結びましたが、信長と將軍足利義昭の関係が悪化するにつれ、信長から離れて義昭側となり毛利氏と連携しました。

天正3年(1575)6月より明智光秀による丹波攻略が開始されます。次第に戦火は丹波一円に広がり、天正6年(1578)から始まった八上城包囲作戦の時には、城内は抗戦派、和平派の2派に分かれ対立が激化し、ついに秀治は和平派に捕らえられて光秀方に差し出されました。6月10日、京都を経て安土に送られ、12日に城下の慈恩寺で磔にされたともいわれています。



波多野秀治 画像(誓願寺蔵・兵庫県篠山市)



八上戦国歴史街道碑

戦国最大の事変「本能寺

入れ替わりの激しい織田家家臣団

先祖代々、織田家に仕えてきた家老であろうが、長年の忠誠を誓い、功績を上げてきた家臣であろうが容赦無く切り捨てる織田信長を見て、明智光秀も危機感を抱きながら日々を送っていたのは間違いないでしょう。佐久間信盛、林秀貞、安藤守就、丹波氏勝、佐々成政等、数多くの家臣を切り捨ててきました。また、その家臣に変わり台頭してきたのが光秀や羽柴(豊臣)秀吉であったのも事実ですが、全く安心できる状況ではありませんでした。

光秀、家康の饗応役を務める



饗応料理の再現
(福知山のうまいもの展実行委員会提供)

織田信長と長年の同盟関係にあった徳川家康は、武田勝頼征討の活躍を認められ、駿河国を加増されました。天正10年(1582)、明智光秀は、その謝礼のために安土へ参上した家康の饗応役を任せられ、万全の態勢で接待を成功させようと、各地から山海の美味なものや珍味などを取り寄せ任せを務めました。しかし、その最中に突如、西国出陣を命ぜられると直ちに坂本城に戻ったといわれています。

“直前の愛宕参籠”連歌の会を催す

天正10年(1582)5月27日、明智光秀は数人の供を従えて龜山城から愛宕山を目指します。神社には西国遠征の戦勝を祈願するための参拝であると伝えていたようです。その夜は参籠することになりますが、神社のくじを2度3度と繰り返し引いたと伝えられています。

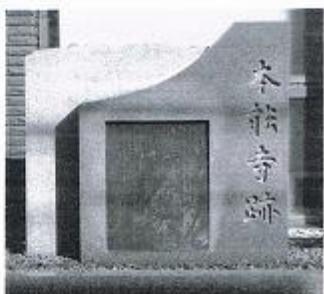
そして翌28日に天下一と称される連歌師・里村紹巴らを招き、連歌会(愛宕百韻)を催しますが、光秀は物思いにふけることが多く、出された粽を笹のまま食したと伝えられています。何れも伝承の域を出ない逸話ですが、本能寺の変直前、揺れる光秀の心を表したエピソードといつてもよいでしょう。

「敵は本能寺にあり」

天正10年(1582)6月1日、午後10時頃に明智光秀の軍勢1万3千が、居城の丹波龜山城を出発しました。

翌2日の午前0時頃には龜山の東、篠まで進み、初めて娘婿の明智秀満をはじめ、斎藤利三・溝尾庄兵衛・藤田伝五・明智治右衛門らの重臣だけに謀叛のことを打ち明けます。このとき重臣たちは、光秀が謀叛を口にした以上は、決行するしかない腹を決めたようです。

やがて光秀の軍勢は老ノ坂を越えて沓掛に至り、小休止を取りました。そして、京都の目前、桂川畔に着いたところで、光秀は兵たちに命じ、新しい草鞋に替えさせるなどして、全員が桂川を渡ったところで「敵は本能寺にあり」の号令を発したといわれています。



本能寺跡の碑(京都市中京区・四条堀川付近)
本能寺の変後、豊臣秀吉によって現在地(京都市役所前)に移転・再建されました。



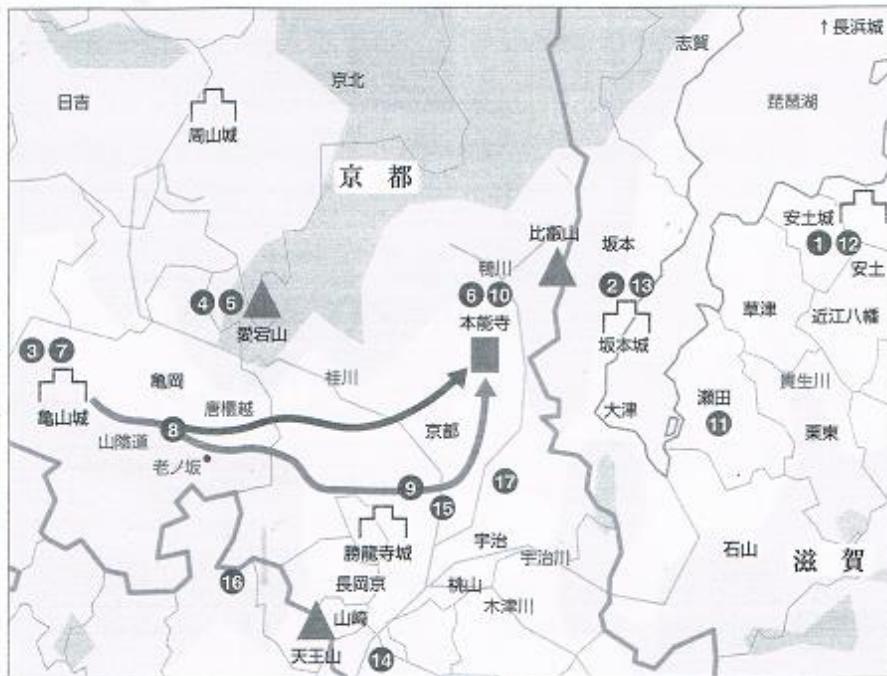
「時は今 あめが下しる(なる)五月哉」
あまりにも有名な明智光秀の発句は、変の後に注目を集めることとなりました。「あめが下しる」と解釈すれば「土岐氏(光秀)が天下を手中におさめる」とも読み、異行に参加した里村紹巴は秀吉に責められたと伝えられています。ただ、後世の為政者たちが忠義を重んじる封建社会を確立するために光秀を悪者にしようと物語を創作した可能性は否定できません。事実、続群書類従の連歌部に収められている愛宕百韻の記録には、「あめが下なる」と明記されています。

の変」

本能寺の変進軍ルート、光秀の動き

老ノ坂越のルートで進軍した明智光秀は、最も信頼する重臣、明智秀満に先鋒として唐櫃越のルートを進むよう命じました。

光秀は事前に、信長を討つことを伝えた家来が逃げ出した場合には、その家来を討つように伝えていましたが、誰一人として本能寺に向かう陣から離れようとはしなかったといわれています。



- ① 5月15日～17日、明智光秀、安土城滞在中の徳川家康の讐応役となる(17日解任)。
- ② 5月17日、光秀、坂本城に帰着。
- ③ 5月26日、光秀、中国出陣のため坂本を発ち、龜山城に入る。
- ④ 5月27日、光秀、「戦勝祈願」のため愛宕山に参籠する。
- ⑤ 5月28日、愛宕山の西坊威徳院にて連歌会を催す。(「愛宕百韻」)同日、龜山城に帰城。
- ⑥ 5月29日、織田信長、安土城を出発、同日京に入り、本能寺を宿所とする。翌6月1日、同地にて茶会を開催。
- ⑦ 6月1日、光秀、龜山城を出陣する。
- ⑧ 6月1日深夜、光秀軍、山陰道・老ノ坂を越えて京に向かう。
- ⑨ 6月2日未明、光秀、桂川で部下に信長打倒の決意を示す(「敵は本能寺にあり!」)。
- ⑩ 6月2日、光秀軍、本能寺・二条御所を急襲。信長・信忠父子を討つ。
- ⑪ 6月2日午後4時頃、光秀軍、瀬田に到着するも、山岡景隆に瀬田の唐橋を落とされ、同日の安土行きを断念。坂本城に向かう。
- ⑫ 6月4日、光秀軍、修復された瀬田の唐橋を通り、安土に入城。京極高次が長浜城を、武田元明が佐和山城を占領。
- ⑬ 6月8日、明智秀満を安土城に残し、光秀は坂本に入城。
- ⑭ 6月10日、光秀、洞ヶ峠にて筒井順慶の軍を待つが到着せず。
- ⑮ 6月11日、光秀、洞ヶ峠を去って下鳥羽へ着陣。淀城・勝龍寺城を固める。
- ⑯ 6月12日、羽柴秀吉、摂津から天王山に着陣。翌13日午後4時頃、光秀軍と戦闘開始。午後6時頃光秀敗走。
- ⑰ 6月13日深夜、伏見の小栗栖で光秀討たれる。



各地を名君として統治し、 的を得た領国経営で領民に愛され続けた 光秀の知られざる功績!

一 丹波攻略に着手した光秀がとった、 統治者としての手腕

明智光秀の善政を語り継いだ丹波の領民達は、「御靈さま」となった光秀のために大祭を行っていることからも、いかに慕われていた領主だったかがうかがえます。福知山では「福知山御靈大祭」、亀岡では「亀岡光秀まつり」や「ききょうの里」といったイベントが今もなお開催されています。

二 国人衆らを家臣として任用!

当時は、どこの土地においても必ず「国人衆」という中間的支配者が存在していました。領民は国人衆などによって支配され、その国人衆らは領主によって支配されるといった形が、鎌倉時代後期あたりから続いていました。明智光秀は、この様な古い体制を排除し、その土地のことをよく知る国人衆たちを家臣として取り立て、代官に任用します。無駄を省き、人材を上手く活用した光秀の政治手腕のひとつといえるでしょう。

三 人心を掌握し、旧幕臣衆をうまく任用した 「光秀の人材抜擢術」

旧幕臣衆を家臣団に組み込み、織田信長軍の中でも最も大きな軍団へと成長した明智光秀は、出身・家柄などは関係なく能力主義でポストを決めていました。このあたりは信長と相通じるものがあったといわれています。しかし、二人の最も大きな相違点は、光秀は家臣の心情を深く理解し、信長軍の中では「途中入社組」である自分を全力でバックアップする家来に感謝し、裏切らなかったことです。光秀の家臣に対する労いは、合戦で討ち死にした家臣を列記し、近江国の西教寺に供養米を寄進しているのをはじめ、合戦で負傷した家臣に対する庇護生の見舞いの書状がいくつも残っていることからも、家来思いの光秀像が伝わってきます。

四 校則?社則?いち早く管理システムを確立 光秀の「家中軍法」

18条からなる家中軍法は、明智光秀が本能寺の変の1年前に福知山城で制定したものといわれています。1条から7条までは、軍団の秩序と規律について記し、8条から18条までは、100石単位の禄高に応じた軍役の基準を明確にしています。また、「定家中法度」では武具の置場所から織田家中の他の部将への挨拶の仕方まで記してありました。それまで織田家中には軍法は存在していなかったこともあり、他の部将もこれに倣って、家中軍法を作ったようです。



明智光秀軍法
(御靈神社蔵・福知山市)

五 城下町「亀山」の都市計画! 亀山城築城時における計算された町づくり



戦国時代において城は、戦闘を第一に考えるのが一般的でした。いわゆる「山城」と言われるものですが、しかし、明智光秀の場合、自然の利点を活かした坂本城や亀山城、福智(知)山城など、領主として自ら築いた城は、領民の暮らしと一体になり、領民の目線で統治するといった考えがうかがえる「平山城」だったということは非常に特徴的といえるでしょう。光秀は城を、単なる戦の砦ではなく政務の館として考えていました。

寛政五年 山陰丹府桑田亀山図(永光尚氏・亀岡市)

丹波国をよくするために… 丹波平定後に光秀が残したものとは

領民を思い地子銭を免除した光秀の経済的な功績

明智光秀は本能寺の変で信長を討った後、上洛すると京周辺の朝廷や町衆・寺社などの諸勢力に金銀を贈与しました。そして、洛中や丹波の地に対して地子銭(土地税・住宅税に相当)を永代免除するという政策を敷きました。この様に、光秀は丹波の民にとっては良策をもたらす領主だったかもしれません。



光秀の功績をたたえる句碑(福知山市 御靈神社内)

命の水を丹波へ、明智光秀の治水工事



かつて福知山を流れる由良川が土師川と合流する地点は、たびたび氾濫を起こしていました。天正8年(1580)明智光秀は福智(知)山城下の建設に伴って、河川の氾濫を防ぐために由良川の流れを大きく北に付け替えるという大規模な治水工事を施しました。その際築かれた堤防は「明智藪」と呼ばれ、領国経営の根幹をなしたこの工事の功績により、光秀は丹波衆によく慕われる事となりました。

明智藪(福知山市)

亀岡光秀まつり

明智光秀公の遺徳をしのび、顕彰する春の一大市民まつりとして開催する「亀岡光秀まつり」は、昭和48年(1973)から毎年欠かさず続けられている市内最大規模のまつりです。

毎年5月3日には、戦国絵巻ながらの勇壮な武者行列が繰り広げられますが、光秀役をはじめとするまつりの参加者は、首塚が祀られる谷性寺で営まれる追善法要と、亀山城跡にある宗教法人大本で執り行われる慰靈祭に参列し、光秀公に祈りを捧げます。

かつての城下町を颯爽と進む光秀公の武者行列と、周辺で行われるイベントで、城下町はにぎわいに包まれます。



谷性寺での追善法要

亀山普請 明智の城

明智光秀と亀山城

丹波進攻のために、光秀が軍事的拠点として整備したのが、ここ亀山城でした。

なお「亀山」という地名は、現時点では、天正5年(1577)と推定される史料(『明智光秀書状』大東急記念文庫蔵小畠文書)に初めて見える地名です。これ以前のことがわからぬため断言できませんが、光秀の時代に使われはじめた地名だったのかもしれません。

光秀の築城した亀山城がどのくらいの規模であり、それが後の亀山城のどの部分に当たるのかについては、確かな史料が存在しないため、不明な点が多くあります。しかし、光秀が、天正年間(1573~1592)の丹波進攻の際の軍事拠点として、亀山城を整備したことは、残されたいくつかの史料からわかります。

光秀の頃の亀山城に関する参考史料として、光秀よりも少し後の時代に記された軍記物の「丹陽軍記」には、近藤秀政の居館であった荒塚山を城とするために受け取り、急なことなので、建築材料は、穴太の観音を始め近辺の社寺仏閣の扉や敷石を借用して、ことごとく荒塚山へ運び、近国の工匠500~600人、人夫5,000人余りを呼び寄せ、本丸・天守・櫓を作り、大門・木戸口の四方に大きな堀切を作ったと記されています。



明智光秀画像
慶長18年(1613)秋
本徳寺蔵

「亀山御城之由来」では、明智光秀が、天正7年(1579)頃に元の余部の岡山城を出丸の地に繩張し替えて、亀山の城と名を改め、天正8・9年(1580・81)に城を築いたとされ、やはり、急ぎの工事であったため、用材は、近郷の寺院から持ち出したとされています。

「丹東城墨記」には、光秀が余部の福井因幡守の居城を攻め落とした後、その城の替わりに急ぎ建築したもので、明智の城跡は、後の亀山城の本丸の東側部分で、黒門の内側にある門を明智門と呼ぶことが記されています。さらに、やはり、近郷の寺院など破却して利用したことが記されています。

どれも、光秀と同時代の史料ではありませんので、どれが史実であるのか断定はできませんが、いずれにしても、丹波進攻という戦いの最中に始まった非常に驚きの城郭整備であったことがうかがえます。

また、天正9年(1581)4月18日付けの光秀の手紙では、現在の船井郡京丹波町和知の人々も「亀山普請」に出ており、相当広い範囲にわたり労働をかけていたことや、丹波平定後も城郭整備がおこなわれていたことがわかります。

城郭整備 豊臣の城

豊臣政権下の城郭整備

天正10年(1582)、光秀の死後、丹波は豊臣秀吉が支配します。亀山城は堀尾吉晴が代官として没収します。秀吉は、亀山城主に、自身の養子や甥である羽柴秀勝(信長の四男)、羽柴秀勝(三好吉房次男)、羽柴秀俊(後の小早川秀秋)を送り込みました。

「亀山城地録」や「丹東城墨記」など、後の時代の記録によると、この豊臣政権下でも、城郭整備がおこなわれています。羽柴秀俊が城主のときに、本丸・二の丸・三の丸が整備され、さらに天守が三重から五重に改められたともいわれています。また、重臣の前田玄以も亀山城主として在任しています。

前田玄以の後、亀山城は徳川氏の直轄となり、代官が置かれました。この頃に、惣堀や内堀が整備されたとされています。

しかし、残念なことに、具体的な史料がありませんので、どの時代にどの部分が整備されたのか正確にはわかりません。

天下普請 徳川の城

天下普請

亀山城の築城は、城主である岡部長盛だけの力によるものではありませんでした。徳川家康の命により、池田長吉(因幡鳥取藩主)らの西国大名が工事に動員されており、幕府が諸大名に助役を命じた「天下普請」によって実施されたものです。

「天下普請」の目的は大坂城に拠る豊臣秀頼ら反徳川勢力の封じ込めと、全国支配強化のため要衝地の築城整備に動員を命じ、その経費を諸大名に負担させて経済力を削ることになりました。慶長6(1601)年の伏見城(京都市)にはじまり、膳所城(滋賀県大津市)・彦根城(滋賀県彦根市)・二条城(京都市)などが、天下普請で築かれました。



丹波亀山城古寧真 美田村頼教撮影

元藩士である美田村頼教により、明治5年～10年頃に撮影された写真です。昭和6年(1931)に死去した刀術師範である美田村頼教の追悼集『追憶』に掲載されました。



膳堂高虎面像

国指定重要文化財

四天王寺蔵

伊勢國津藩の祖、膳堂高虎は、城作りの名人といわれ、伏見城(京都市)や篠山城(兵庫県播磨市)など、家康が指揮した天下普請の城の多くは、この高虎が縄張り(設計)をしたといわれています。

慶長13年(1608)、伊予國今治城主(愛媛県今治市)であった高虎は、伊勢國(三重県)津藩へ転封となりました。慶長15年(1610)、家康から丹波亀山城の天下普請を指示されたのを受けて、旧今治城の天守の材料を提供したといわれています。



現在の今治城天守

今治城は、膳堂高虎が慶長9年(1604)に築城しました。海岸部に築かれた平城で、三重の塔には海水を引き入れていました。慶長13年(1608)、伊勢國(三重県)津藩主に任じられた高虎は、新たな領国の居城に使用するべく今治城の天守を解体し、織田家の大阪屋敷へ運びました。

高虎は最初、伊賀上野城の天守にと考えていたようですが、慶長15年(1610)夏2月に亀山城の天下普請が発令されると、これを徳川家康へ附上し、亀山城の天守とすることを進言します。

高虎が今治城を去った後、天守は再建されず、本丸には破風をもつた北隅櫓などが建造されました。現在の天守は、昭和55年(1980)に再建されたものです。

[写真提供：今治城管理事務所]

天守完成

層塔型天守と望楼型天守

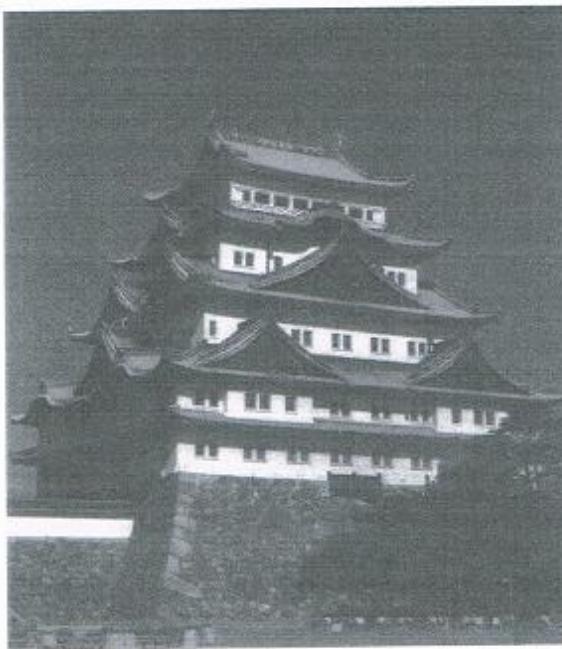
天守の形式は、**望楼型**と**層塔型**の二つに分けられています。

望楼型の方が発生は古く、天正7年(1579)に建てられた、初めての天守を持ったとされる安土城は、この望楼型です。2階建て程度の入母屋造(大棟と平行の面だけでなく、妻面にも屋根の傾斜がある形式)の建物を基盤として、その上に2階又は3階建程度の上層階が付く構造であり、基盤となる建物が正方形である必要はなく、また、柱位置が上下階で揃うので建築上の強度が増すという性質を持っています。姫路城(兵庫県)や彦根城(滋賀県)、松江城(島根県)の天守がこの型式で、複雑かつ優雅な印象を受けます。

一方、各階を均等に小さくして順々に積み上げていく構造の層塔型は、慶長9年(1604)に築か

れた今治城(愛媛県今治市)が最初です。層塔型は構造が簡単で、比較的短期間で建設することができました。また、各階ごとに「武者走」と呼ばれる防備のための廻り廊下を設けることもできました。しかし、建設のためには、1階部分が正確に正方形でないと上層階の形がゆがんでしまいます。土台となる石垣を正確に築くには、高度な技術が必要でした。

この層塔型の代表として、今治城天守を移築した丹波亀山城や名古屋城が挙げられます。丹波亀山城は、最上階以外には飾りの破風(屋根上にできる三角形の壁面)ももたず、非常にすっきりとした背の高い印象を受けます。名古屋城は、このスマートな層塔型天守の各階の屋根に飾り破風をつけて装飾を施しています。

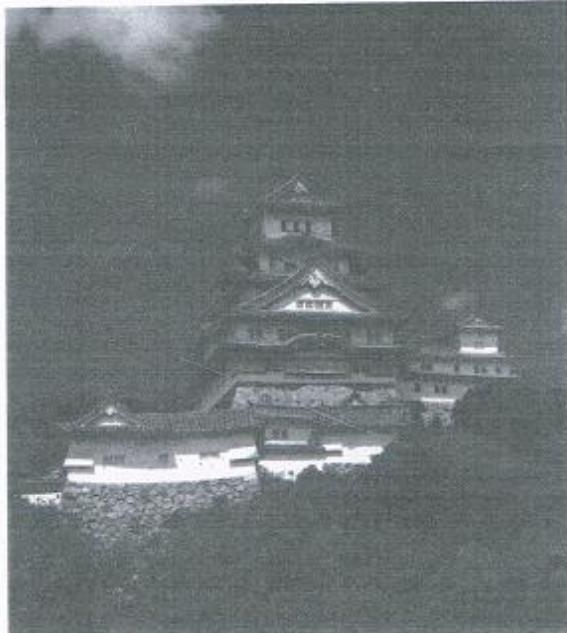


現在の名古屋城天守(層塔型天守)

名古屋城は、亀山城で天下普請の行われた慶長15年(1610)に築城が開始されました。名古屋城も天下普請による築城で、亀山城と同じ層塔型の天守(地上5重5階、地下1階)が築かれました。なかでも天守台の築造は、築城高處と並んで築城の名手と評される加藤清正が行つたのです。

築城後も天守や櫓などは遭されていましたが、昭和20年(1945)に空襲で消失してしまいました。現在の天守は、昭和34年(1959)に再建されたものです。

(写真提供:名古屋城総合事務所)



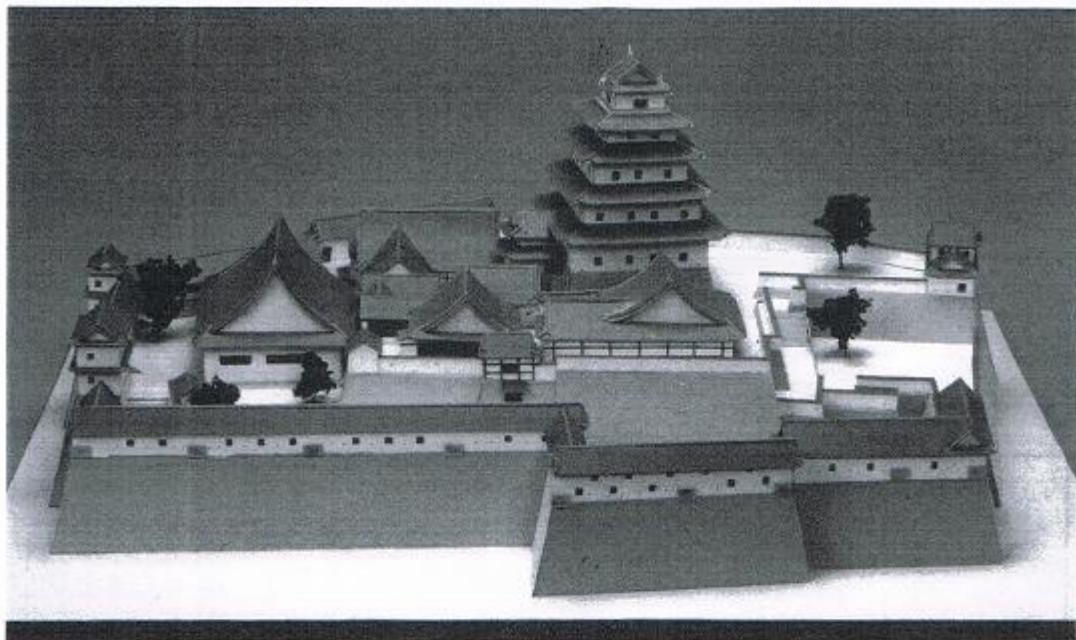
現在の姫路城天守(望楼型天守)

池田輝政(徳川家康の娘婿)が築いた姫路城の天守は、慶長14年(1609)に完成しました。天守の内部は地上5重5階、地下1階で、築城時から現存する天守の中では最大の規模です。

天守の形式は、入母屋造りの大きな建物を基部とし、その上に物見(望楼)を載せるもので、望楼型と呼ばれます。亀山城のような層塔型天守が登場するまで、天守はこの望楼型の形式で築かれていました。

千鳥破風・唐破風や出格子窓を備えるなど、層塔型と比べて装飾的な外観から、「白鶴城」の別名が知られています。

(写真提供:姫路フォトバンク)



丹波亀山城復元模型(本丸部分)

小田竜氏制作

慶長15年(1610)に、天下普請により整備された丹波亀山城の本丸部分の復元模型です(約150分の縮尺)。

この模型は、平成10年(1998)3月に、神戸芸術工科大学芸術学部環境デザイン学科の卒業制作の作品として制作され、同大学の奨励賞を受賞したものです。屋根瓦の表現として、カッターナイフで細かく切れ目を入れ、石垣は細かい四角紙片が貼り付けられています。

天守の大きさ

内堀・外堀・惣堀の三重の堀に囲まれた亀山城と城下町の規模は、城内で東西約800m、南北約400m、大手に面する城下町で東西約1,500m、南北約800mの大規模なものでした。

その中心に、そびえる5重5階の天守の高さは、石垣部分が約3間(1間を6尺5寸で計算、約6m)、その上に5重5階の建物部分が約12間5尺9寸(約25m)で、天守の総高は約31mになります。

広さは、天守1階が9間半(約18.7m)四方、2階が8間(約15.7m)四方、3階が6間2尺8寸(約12.7m)四方、4階が4間半1尺7寸(約9.3m)四方、5階が3間2尺2寸(約6.5m)四方で各階は、正方形の平面です。

下の階から上の階へ、各階ごとに1間半(約3m)ずつほど均等に小さくなっているのは、まさに層塔型天守の特色です。1階が約349畳の広さで、疊は約250疊分、以下各階ごとに約176疊分、約115疊分、約62疊分、約30疊分となります。

もちろん、軍事的な目的で造られた天守ですので、窓際には、籠城の際に鉄砲や弓矢の射撃をする「武者走」の空間が整備され、各階は生活空間ではありませんが、籠城には十分な一定の広さがありました。

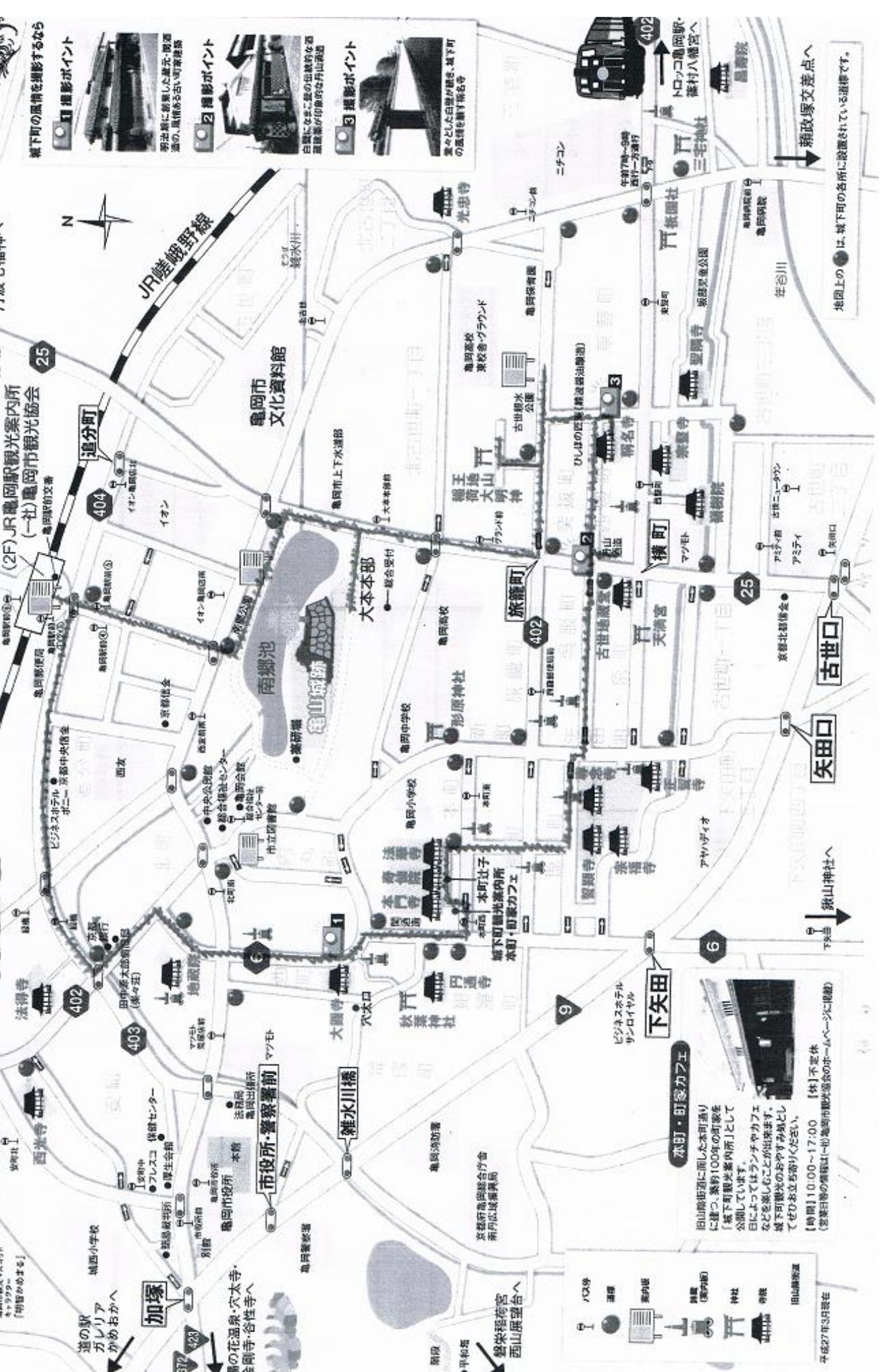
各階の窓は半間(約90cm)窓で、突き上げの板戸付きです。窓数は1階に14枚、2階に16枚、3階に12枚、4階に10枚、5階には中央に両引き分け戸が4枚ありました。合計56枚ですが、1階の窓数は西面に小天守があるため少なくなっています。鉄砲や弓矢の攻撃用の小窓である狭間も24枚ありました。

天守1階へ入るための小天守は、2階建てで、東西3間半(約7m)、南北3間の規模です。天守入口となる門は「くろかねの門」(鉄板張りの開き扉)でした。

京都・亀岡城下町散策MAP

明智光秀の焼焼以来、戦国・江戸時代を通じて山陰と在吉が重要拠点として
発展した城下町・郊外の歴史をたどり歩こう

「城下町めぐらし」と
「城下町めぐらし」



地図上の ● は、城下町の各所に設置されている道標です。

→ 領政塙交差点へ

【開場日時の情報】(一社) 亀岡市観光協会のホームページに記載)

【開場日時の情報】(一社) 亀岡市観光協会のホームページに記載)

→ 領政塙交差点へ